

とうきょう すくわくプログラム実践報告書(八王子市)

施設名	八王子市立富士見台保育園
-----	--------------

1. 活動のテーマ

<テーマ>

感触

<テーマの設定理由>

5月に泥んこあそびを行った中で、砂が黒いところは「冷たい」「ドロドロしている」との気づきがあり、砂が茶色いところは「あたたかい」「トロトロしている」と泥でも日なたと日陰では感触の違いがあることに気が付いた。地面に寝そべり「すべすべして気持ちいい」と全身泥だらけになる子や両手に泥を抱え「泥って重いね」と話す子がいた。夏祭りの神輿作りでフィンガーペイントを行った時にも、泥んこあそびの経験から、指先や手のひら全体で絵の具の感触を楽しんでいた。 以上のことから「感触」をテーマに指先から全身まで使った感触あそびを展開し、子どもたちの反応を見ながら、様々なあそびを盛り上げていきたい。

2. 活動スケジュール

- | |
|--|
| <p>【春～夏】泥んこあそび、砂あそび、片栗粉あそび、小麦粉粘土、ボディーペイント、プールあそび</p> <p>【 秋 】泥団子作り、風船あそび、指先あそび、科学あそび、制作あそび</p> <p>【 冬 】氷・雪あそび、静電気、新聞紙プール</p> |
|--|

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・子どもたちがあそびの中で気づいたりその気づきから様々なことを自分たちで試して考えたりできるように、子どもが自由に道具や材料を使うことができる環境を整える。

【準備したもの】

・雨どい、片栗粉、小麦粉、絵の具、ふるい、ざる、排水口ネット、新聞紙、ボールプール、風船、空きカップ、制作材料コーナー

4. 探究活動の実践

＜活動の内容＞

【春～夏】

- ・泥んこあそびで、全身で泥に触れ、泥の形状や場所によつての温度の違いに気づき、子ども同士で感触を共有したり場所や水、砂の量を変え感触の違いを確かめたりした。そこから泥団子づくりに発展する姿がみられたが、暑さで戸外あそびができなくなったこともあり、子どもたちの興味が泥から違った物（水や絵の具）の感触に変化していった。
- ・プールあそびでは、泥んこの感触の違いを確かめた経験から、太陽の光が当たることでの温度が変化していることに気づきそれを楽しんでいた。

【秋】

- ・通常の粘土あそびの中で、自分たちで粘土を作りたいという声があがり、片栗粉粘土を作ってみる。片栗粉を準備すると、水が必要であることに気づき片栗粉粘土を作る。片栗粉と水の量の違いや力の加え方で片栗粉粘土の形状が変わることに気づき繰り返し試していた。
- ・廃材や様々な材料を使った製作あそびが盛り上がる。のり・テープ・カラーポリ袋・綿・画用紙・花紙・廃材等、様々な素材に触れる中で、肌触りや硬さ、音の違いに気づきその感触を活かして各々のイメージを膨らませ製作をしていた。
- ・科学あそび体験では、風船等を使って音の振動を体感した。

【冬】

- ・新聞紙あそびから新聞紙をたくさんちぎったプール作りに発展し、新聞紙プールの中に埋まると温かいことに気づき子ども同士でその気づきを共有していた。
- ・表現あそびからマット・ジョイントマット・ウェーブバランス等様々な用具をつなげ、迷路づくりに発展する。裸足になり作った迷路であそぶ中で、道具によつての温度・肌ざわり・歩きやすさの違いに気づき、迷路の道を様々に変化させながら楽しんだ。
- ・寒くなり園庭に霜柱や氷ができていくことに気づき、触る。時間が経つと溶けていくことに気づき、何故なのか疑問を持ち、どうやったら氷ができるのか試したりした。また、絵の具を使用してかき氷づくり等のあそびに広がった。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

【春～夏】

○泥んこあそび

- ・砂に水をかけると泥ができ手で触ったり体に塗ったりした。保育者がどう感じたのか言葉で表現できるように問いかけると、「冷たい」「どろどろする」と泥の感触を全身で感じ言葉で表現した。友達同士で泥を塗り合い「気持ちいいね」と感触を共有し、少し時間が経つと、体に塗った泥が乾き「色が変わった」「バリバリする」と感触や色の変化に気づき楽しんだ。乾いた泥に水をかけたらどうなるか想像して試そうとする姿もあった。
- ・園庭を広く使い泥んこあそびをしていく中で、「こっちの泥は温かい」と温度の違いに気づいた。「なんで？」という子どもの疑問に対し、保育者が何故なのか考えられるように問いかけることで、様々な場所の泥に触れ違いを考えたり確かめたりしながら「太陽が当たっているから温かい」と気づく。
- ・泥の硬さの違いに気づき、砂や水の量を変え泥の硬さの変化を試した。そこから、泥団子づくりにあそびが広がり、丸い泥団子を作るにはどのような硬さの泥がいいか試し、砂や水の量を調節しながら適度な硬さになるように試行錯誤していた。

【秋】

○片栗粉粘土

- ・油粘土遊びでの保育者との会話の中で、粘土を作ることができると知り、片栗粉を使って作ってみる。どうやったら粘土になるのかと保育者が尋ねると、「水を入れる」という声が挙がり、試してみる。空のペットボトルや器を準備しておく、自由に水を入れ、「サラサラする」「冷たいね」「手にくっついた」「泥みたいになったよ」等、水を入れることによって片栗粉粘土の状態や感触の変化を体感し楽しむ。作る人によって片栗粉粘土の硬さが異なることに気づき、「こっちはドロドロなのになんであちは粘土になっているの？」と疑問が出る。保育者が何故なのか、どうやって今の片栗粉粘土の状態にしたのか振り返ることができるように声を掛けることで、何故なのか考えたり想像したりし、自分の求める硬さになるように水と片栗粉の調整をしていた。また、「ヨーグルトみたい」という子どもの声から、絵の具を入れて色を付け、色を混ぜることでの色の変化に気づいたりままごとをしたりとあそびが広がった。

○製作あそび

- ・のり・テープ・カラーポリ袋・綿・画用紙・花紙・廃材・ペン等、子どもたちが自由に使用できる環境を保育者が整えたことで、子どもたちがイメージした物をどうやって作っていかうか、年長児を中心に考えながら製作あそびが盛り上がる。春から様々な感触に触れ、触り心地や温度、音等の違いや変化に気づき、何故なのか考える経験を重ねてきたことで、製作あそびの様々な素材や材料の感触にも興味を示した。「ツルツルするね」「冷たい感じがする」等、感じたことを言葉で表現したり友達と共有したりしていた。「あれは？これは？」と様々な素材に触れ試していくことで、製作あそびの材料の幅も広がり、製作の表現の幅も広がった。年長児が中心に楽しんでいたが、それを見た3・4歳児が興味を示す。5歳児が、3・4歳児のイメージする物をどうやって作っていくかを、一緒に考えたり教えたりすることで、異年齢での関わり深まった。また、その関わりから、ごっこあそびへとあそびが発展していった。

【冬】

○新聞紙プール

- ・製作あそびで使用した大きな画用紙や新聞紙を破り、破れる音を「びりびり」と言葉にしたり破ったものを上に舞い上がるように投げ「雨だ」「花が降ってきたみたい」と見立ててみたりして遊ぶ。保育者がボールプールの枠を準備すると、その中に破いた新聞紙を入れる。「プールに潜ろう」と、子ども同士で新聞紙をかけ合い、新聞紙に体が埋まると、「なんか、温かいよ」と気付く。何故、温かいのか尋ねると、「太陽が当たってるからじゃない？」「フワフワで空気がいっぱい入ってるからじゃない？」と年長児を中心に、何故なのか考えて言葉にしていく。後日、風船遊びをしていく中で、新聞紙プールのことを思い出した子どもたちは、「風船プールは温かいかな？」と声が挙がり、試してみる。新聞紙プールの方が温かいと感じた子どもたちは、「新聞の方が体にくっついていてから温かいかな？」と子ども同士で話をしていた。

○迷路あそび

- ・ホールで裸足になりサーキットあそびを楽しむ中で、足の裏で温度・硬さの違いを言葉にする。マット・ジョイントマット・ウェーブバランス・机・パーテーション・ラバーリング・トンネル等、コースになりそうな物を保育者が準備しておく、「こっちはフワフワの道にしよう」「温泉（新聞紙プール）は休憩のところにしよう」と、感触の変化を楽しめるようなコースづくりを始めた。

○霜柱・氷

- ・気温が低い朝、園舎横の日陰の場所を歩くと、ザクザクと音がする事に気付く。「何の音だろうね？」と保育者が声をかけると、シャベルを持ってきて土を掘る。霜柱が出てきて、手に取ってみると「氷だ。冷たいよ」と、友達や保育者と共有した。その間に、氷が溶けてなくなった変化に驚き、それもまた友達と共有している。「多分寒いから霜柱ができたんだね」「他にもあるかな」と探していた。
- ・前日に保育者がカップに少量の水を入れ、子どもの目に付く所に置いておく。戸外遊びの中で、氷に気付いた子どもたちは、手に取り冷たさや冷たすぎて手が痛む感覚を味わった。「水を入れておいて置いたら凍るかな？」と、様々なカップに水を張り置いておくが、夕方、戸外に出たときに確認するも凍っておらず「氷じゃない」とがっかりする。すると、年長児から「太陽に当たっているから凍らないんだよ。」と声が挙がる。それをきいた他児は、日陰になりそうなところ複数に水を張って置き、翌朝、確認することを楽しみにする。翌日、確認すると、同じ場所でも凍っているところと、凍っていないところがあり、そこでも何故なのかと疑問が挙がる。
- ・できた氷を手に持ち、溶かしたりシャベルで削ってみたりする。「かき氷みたい」という子どもの声から、絵の具や筆・カップを用意すると、かき氷あそびに広がっていった。

【泥んこあそび】



【片栗粉粘土】



【製作あそび】



【氷・雪あそび】



【新聞紙プール・迷路あそび】



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・泥んこあそびの中で、保育者の問いかけによりどんな感触が言葉にして共有する経験を重ねていくことで、今まで楽しんできた製作あそびやプール、運動あそび等でも、感触に興味を示して、あれこれ触ったり感触の変化を試行錯誤して試したりする姿が見られるようになった。

・子どもが感触を通して感じた疑問に対して、子どもが考えたり試したりできるような声掛けや援助を保育者がしていく中で、子ども同士で「～だからじゃない?」「○○ならどうかな?」と、試行錯誤していく姿が見られるようになり、そこから、あそびが広がったり、異年齢での関わりや友達関係が広がったり深まった。

・子どもの気づきや経験・学びを広げたり深めていくためには、様々な道具や材料を子どもが自由に使用できるような環境を整えることが必要であると改めて感じた。